# 令和6年度インクルーシブな学校運営モデル事業 取組概要 【福井県】

| | |
|---|---|
| 目的・目標 | ・県内の学校における障がい理解が深まり、インクルーシブ教育システムの推進及び充実につなげていく<br>・障がいのある児童生徒の学びの連続性を高め、各学校の柔軟な教育課程の編成や指導体制、校内体制づくりの構築を目指す |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 学校運営連携校 | 福井県立清水特別支援学校（対象：知的障害）<br>越前町立朝日小学校<br>福井市清水中学校 | 隣接型 | カリキュラム・マネージャー | 元特別支援学校校長<br>元福井県特別支援教育センター指導主事 |

## 取組概要

【全体目標】
〇年間を通した定期的な交流及び共同学習へとより発展させ、障がいのある児童生徒の学びの場の連続性を高めていき、また、小学校及び中学校における障がい理解の深まりや、特別支援学校と小学校及び中学校の教育課程や指導体制、校内体制づくりの構築を目指していく。
〇障がいのある子と障がいのない子が交流及び共同学習を、定期的かつ発展的に展開していくことで、県内の学校において障がい理解が深まり、インクルーシブ教育システムの推進及び充実につなげていく。
【特別支援学校と小学校における目標】
・柔軟な教育課程の編成を検討し、障がいのある子の学びの連続を高める
・活動を共にするだけでなく、障がいのない児童たちが障がいのある児童たちに対してどのような声掛けや提示の仕方等をすれば伝わるのか、また楽しめるのかを主体的に児童たちが考え授業づくりに参画していく
【特別支援学校と中学校における目標】
・特別支援学校と中学校生徒が協働で作品を制作し、地域での展示会を企画運営するなど、地域に発信する教育を展開する
・特別支援学校の生徒からも感性を学び合うことでの障がい理解を推進する
【具体的取組】
交流及び共同学習の実施においては、低学年時から居住地校交流を継続して行ってきた特別支援学校と小学校及び中学校との連携をより強化しながら実践を進めていく。年間を通した定期的な共同学習（教科等）を行う中で、小学校及び中学校における特別支援教育への理解促進だけでなく通常の学級における教育課程の見直しや工夫など柔軟な編成についても協議していく。
共生社会の実現を目指して、共に学び共に育つことを追求しつつ、地域の担い手となる子どもの育成を目指す。そのために、小・中学校における通常学級や特別支援学校の児童生徒が、場を共有するだけでなく誰一人取り残されることなく教育を受ける環境づくりを行う。また校内の体制、学習活動における合理的配慮についても整理していく。
教職員については、小・中学校と特別支援学校がともに学校を開き、教職員が両校の目指す授業づくりを検討する中で、外部専門家との連携も強化しながら特別支援教育の専門性の向上を目指す。

# 令和6年度インクルーシブな学校運営モデル事業　取組概要　【福井県】

## ①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

【ねらい】
・学校間において教科の指導内容等のすり合わせを行い、教育課程の柔軟な編成を検討し、連続した学びを保障
・活動を共にするだけでなく、障がいのない児童たちが障がいのある児童たちに対してどのような声掛けや提示の仕方等をすれば伝わるのか、また楽しめるのかを主体的に児童たちが考え授業づくりに参画していく

【対象学年】
・清水特別支援学校小学部4年と朝日小学校4年、清水特別支援学校小学部5年と朝日小学校5年
・清水特別支援学校中学部と清水中学校美術部

【指導内容や指導方法の工夫】
〇特別支援学校で使用している教材・教具の活用や環境の設定を取り入れる
・音楽で、電子黒板に歌詞や活動の流れを映し、どの児童にとっても視覚的に分かりやすく提示。
・特別支援学校の児童に馴染みのある曲を用いて、簡単な手話も導入し、日常生活の場へもつなげる。
・特別支援学校が身近な生活用品を使用して作成した筆を教材として提供し、小学校児童の表現の幅を拡大。
・グループ活動を取り入れ、少人数で関わる時間を設定。
・特別支援学校の教員がサブティーチャーとして授業に入ったり、特別支援学校の児童に声掛けや提示の仕方を示したりすることで、関わりのロールモデルとなる。絵カードを2枚提示して、特別支援学校の児童が選択しやすいようにする。また、高跳びでは、高さを調節しやすいようにゴムの利用を提案。小学校の児童が自分たちで考えて、関われるような環境の設定。

## ②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

【教員配置等の工夫】
・両校の教員によるティーム・ティーチングの実施により、特別支援学校の児童は、音楽の専門の先生から指導を受け、楽器の取扱いなどの習得につなげる。
・両校の教員がそれぞれの学校の特長を把握したうえで授業を考える。

【学校運営連携校間の一体的で専門性を生かした指導体制の構築】
・特別支援学校経験のあるカリキュラム・マネージャーが授業を参観し、授業後すぐに助言を両校で共有。授業における合理的配慮など助言内容を資料として、両校に送付することで、担当教員に留まらず校内の教員全体での研修にもつながる。合理的配慮についての整理。
・交流及び共同学習後にメインティーチャー、サブティーチャーの連携等について振り返り、次の授業につなげる。
・交流及び共同学習に向けて事前打ち合わせシートや評価シートを両校で共有しながら作成し、学校運営連携校間での共通理解を図る。

【各学校運営連携校における校内体制の構築】
〇特別支援学校
・校内インクルーシブ委員会の立ち上げや担当者以外の教員に対しても情報共有を推進。
〇小中学校
・事業開始前にインクルーシブ教育についての研修（障がいについての理解促進）。
・校内での運営の仕方や組織内での位置づけの検討。
・基礎的環境整備や合理的配慮についての整理。

# 令和6年度インクルーシブな学校運営モデル事業　取組概要　【福井県】

| | |
|---|---|
| **本事業の成果** | 1カ月に1度の定期的な交流及び共同学習を実施し、活動内容に対する目標を掲げたことで、お互いの子どもたちの関係づくりや、「やってみる」ことへトライする力がついた。教科以外の休み時間や給食時間等でも児童の様子にも変容が見られた。特別支援学校の児童については、小学校の教員の一斉指導の声掛けで、トライアングルのリズム打ちができるようになった。これまで友達を見ながらトライアングルを叩いてことから、友達に合わせて一緒に叩こうとするようになっていった。小学校4年生の児童が簡単な手話を使って、特別支援学校の児童へ音楽の授業以外でも働き掛けが見られた。小学校の児童は、特別支援学校の引率の教員の関わりを見て、関わり方を知り、真似るようになった。関わり方としては、集団活動の中における個として、教師がロールモデルを示すことが効果的であった。特別支援学校の教材・教具の共用については、図工の時間や体育の時間に行い、小学校児童にとって表現することの幅が拡大した。さらに小学校の教員は電子黒板の活用や、リズム動画を複数準備するなど、視覚支援が日常になり小学校の通常学級の児童にとってもわかりやすい授業となっていた。<br>本事業における小学校4・5年生の保護者へのアンケートを実施（回答率:79%）したところ、『「交流及び共同学習」について家庭で話をした』への回答は、全体の74%であった。『「交流及び共同学習」を定期的・継続的に行ったことは、子どもたちの障がい理解や多様性を認め合う心の育成につながった』と肯定的に考えていた保護者は、99%であった。また、98%の保護者が本事業に満足していた。特別支援学校の保護者は、保育園からの友達と小学校においても同じ場所で学べることに大変満足していた。 |
| **課題と今後の展望** | 【課題】<br>これまでの交流及び共同学習で考えていた目標を、それぞれの学校が再考した。従来行ってきた交流及び共同学習が、交流部分での目標に重きを置いていたことを実感したものの、教科で実施していけるか両校でのすり合わせに時間を要した。交流及び共同学習の機会（回数）を増やすことに焦点を当て、活動内容の取扱いや指導方法の工夫、指導目標や体制づくりの検討が十分でなかった。 また、設置主体が異なるため、打ち合わせシートや評価シートを共有しながら作成することができず手間と時間がかかった。<br>【展望】<br>・年度初めに両校の年間指導計画をすり合わせて、共に学ぶ教科及び単元を決定するなど計画的に準備し、お互いの教科の目標が効果的に達成できる共同学習を目指す。<br>・特別支援学校の教員が小学校でメインティーチャーをつとめる等、所属校にこだわらずに授業を実施する。<br>・それぞれの学校の交流コーディネーターや特別支援教育コーディネーターが両校をつなぐパイプ役となり、更なる授業改善に取り組む。<br>・カリキュラム・マネージャーの他、大学教授からの授業観察や指導助言、校内研修、学校運営連携協議会への参加など、地域の資源を含めた外部専門家の活用を促進し、専門性を高めた授業づくりに取り組む。 |